100人カイギ神奈川チーム

全国に広がる100人カイギの波

■地域の人を知り、新たなつながりを創出

毎回５人の地元の方がゲスト登壇者となり、これまでの人生やご自身の仕事などについて話す100人カイギは、2016年に東京都港区から始まり、今では全国41地域で計230回、12,000人以上が参加している“地域の人を知るための活動”です。神奈川チームは特に活発で、横浜市、川崎市、相模原市、平塚市、鎌倉市、小田原市、茅ヶ崎市、厚木市、南足柄市、開成町の10地域で開催されています。

100人カイギは、人を知ることが目的のため、テーマはありません。ゲスト登壇者の年齢、活動や経歴は様々で、中学生や高校生から、地元商店街の店主、カルチャースクールの先生、企業の代表取締役、国会議員といった方々まで、バラエティに富んでいます。お互いのことに関心を持つ方が多く、休憩時間や懇親会では至るところで話の輪ができます。また、「まちおこしをやりたい」という話題で盛り上がると、その場に参加していなかった人達も口コミでまちおこしイベントに参加したり、過去の登壇者のお店を巡るツアーが開催されたりと、新たなつながりが生まれているそうです。

■モチベーションを保つ運営方法

また100人カイギは、運営面でも一工夫しています。そのひとつが登壇者が100人になったら解散するという点で、コミュニティの中には、続けているうちに勢いがなくなって終わってしまうものありますが、100人カイギは最初から終わりが決まっているので、１回にかける想いが自然と強くなり、高いモチベーションを維持して運営できるそうです。

■参加者も運営者に

また、神奈川チームは、各地域の事務局同士のつながりが深いことも一つの特徴です。地域によって目的も運営方法も異なる中で、課題を共有し意見交換することにより、他地域での立ち上げをサポートするなど、地域横断的な交流が生まれています。

具体的には運営体制を強化するために、参加者が運営に携われるような工夫をしています。例えば、ボランティアでお手伝いただいた人に、割引価格で100人カイギに参加できるチケットを用意することです。この仕組みは大人気で、ボランティアチケットはすぐに売り切れてしまうそうです。参加者の方からは、「参加していると人のつながりができてどんどん面白くなり、気が付けば自分でも何かできないか探してしまう」といった声も寄せられているそうです。

現在、100人カイギ神奈川チームでフェスを開こうと検討を進めており、100人カイギが生む新たな地域コミュニティが、今後さらに広がっていきます。

一言アドバイス

地域に多くいる、地域とのつながりを求めている方を掘り起こすことが大切。

100人カイギ神奈川チームのみなさん

成功のコツ

- 多様な人のゆるやかなつながりの創出
- 終わり方を明確にすることにより、運営のモチベーションを維持
- ボランティアが参加しやすい仕組みの構築

こすぎの大学（川崎市）

学びたい、教えたい、が交錯するコミュニティ

一言アドバイス

肩の力を抜いて無理をしないことが重要です。

こすぎの大学
事務局
岡本 克彦さん

成功のコツ

- 誰もが気軽に「先生役」「生徒役」になれる参加しやすい仕組み
- 課題を共有する仲間と立ち上げることで取組みが充実する
- 助成金に頼らない等身大の運営

■学びを通じた地域づくり

こすぎの大学は「大人から子どもまで、武蔵小杉に住んでいる方、勤めている方、関心のある方が、自由に広く楽しく学んでつながる」をテーマに、2013年に発足しました。「誰もが先生役、誰もが生徒役」をモットーに、毎月１回、数十人の参加者でワークショップを行っています。

■地域を知りたい、仲間が欲しい

こすぎの大学設立のきっかけとなった方が、事務局の岡本 克彦さんです。岡本さんは、長年武蔵小杉で暮らし、勤務していましたが、地域のことをよく知らず、知り合いも全くいないことに寂しさを抱いていたそうです。そんな折、読書をテーマにした地域の交流イベントに参加してみた岡本さんは、そこに参加していた同じ悩みを持つ人たちと意気投合し、こすぎの大学を設立しました。

■人と人がつながる学び舎

「懇親会が大切なので、懇親会だけでも来て欲しい」と笑いながら話す岡本さん。ワークショップの後の懇親会はいつも大盛り上がり。懇親会の中で、参加者の方が「あれを話したい」「自分はこんなことができます」と、自然に次の先生役が決まるそうです。ある人が「手品ができる」と言うと盛り上がり、そのまま先生役に決まったこともあったとか。これまで80回以上実施したワークショップで、事務局が先生役をセッティングしたのはほんの数回というほど。生徒役が先生役になり、それをきっかけにまた自然と新たな仲間が参加する。人の輪がどんどん広がり、「こすぎの大学で、自分にもできると勇気をもらいました」、「懇親会で同じ趣味の仲間に出会えました」といった声も寄せられています。

2017年には「部活動」ができました。これは参加者が自発的に始めたもので、仲間とただ喋る「おしゃべり部」、パパの楽しみ方を探求して親子向けのイベントを開催する「パパ部」など様々なものがあります。部活動からこすぎの大学に参加する人も現れてるなど、人のつながりが生まれ続けています。

■自分たちが楽しむために

そんな岡本さんたちが運営をする際に心がけていることは、「自分たちがまず楽しむために、肩の力を抜くこと。無理をしないこと」です。そのために、運営は６名がチームを組み、全体を共有しながら、役割分担して取り組んでいます。最近では、ワークショップに参加している常連さんも手伝ってくれるようになりました。また、補助金に頼らずワークショップの参加費の範囲内で等身大の運営をするように設計しています。

これまで地域との接点が薄かった人が、地域を知り地域の人とつながる場所として、こすぎの大学はこれからも活動を続けていきます。